

## 1.6 分布関数

分布というものはまだ関数に比べて分かりにくいような気がする。そこで、関数の言葉で分布を語ることを考える。

**定義 1.2** 確率空間  $(\Omega, \mathcal{F}, P)$  上で定義された確率変数  $X$  に対してその分布関数  $F_X(t)$  を

$$F_X(t) := \mu_X((-\infty, t]) = P(X \leq t) \quad (1.11)$$

によって定義する。

**命題 1.14** 確率変数  $X$  の分布関数  $F_X(t)$  は以下の性質を持つ。

- (i)  $F_X(t)$  は  $t \in \mathbf{R}$  について単調非減少。
- (ii)  $F_X(t)$  は  $t \in \mathbf{R}$  について右連続。
- (iii)  $\lim_{t \rightarrow -\infty} F_X(t) = 0, \lim_{t \rightarrow \infty} F_X(t) = 1$

**証明** (i)  $s < t$  のとき  $F_X(s) \leq F_X(t)$  を言えばよい。明らかに、 $\{\omega \in \Omega; X(\omega) \leq s\} \subset \{\omega \in \Omega; X(\omega) \leq t\}$  だから、

$$F_X(s) = P(X \leq s) \leq P(X \leq t) = F_X(t)$$

(ii)  $t_n \searrow t$  のとき  $F_X(t_n) \rightarrow F_X(t)$  を言えばよい。このとき  $X^{-1}((-\infty, t_n]) = \{\omega \in \Omega; X(\omega) \leq t_n\}$  は  $n$  について単調に減少して、

$$\bigcap_{n=1}^{\infty} X^{-1}((-\infty, t_n]) = X^{-1}\left(\bigcap_{n=1}^{\infty} (-\infty, t_n]\right) = X^{-1}((-\infty, t])$$

なので、確率の連続性から

$$F_X(t) = P(X \leq t) = P\left(\bigcap_{n=1}^{\infty} \{X \leq t_n\}\right) = \lim_{n \rightarrow \infty} P(X \leq t_n) = \lim_{n \rightarrow \infty} F_X(t_n)$$

(iii) 上と同じように考えると、

$$\begin{aligned} \lim_{t \rightarrow -\infty} F_X(t) &= P(\bigcap_{n=1}^{\infty} X^{-1}((-\infty, -n])) = P(X^{-1}(\emptyset)) = 0 \\ \lim_{t \rightarrow \infty} F_X(t) &= P(\bigcup_{n=1}^{\infty} X^{-1}((-\infty, n])) = P(X^{-1}(\mathbf{R})) = 1 \end{aligned}$$

**例 1.12**  $\mu(\{0\}) = 1$  のとき、 $\mu(A) = 1 \Leftrightarrow A \ni 0$  という分布が得られる。この  $\mu$  を  $\delta_0$  とかき、 $\{0\}$  に集中する質量をもつディラック (Dirac) 分布という。この分布関数は

$$F(t) = \begin{cases} 0 & t < 0; \\ 1 & t \geq 0 \end{cases}$$

となる。

**例 1.13** サイコロの目の分布は

$$\mu(\{i\}) = \frac{1}{6}, \quad i = 1, 2, 3, 4, 5, 6$$

で与えられる。この分布関数を求めてみよう。 $x < 1$  のとき、

$$F(x) = \mu((-\infty, x]) = P(\text{目の数が } x \text{ 以下}) = 0$$

$1 \leq x < 2$  のとき

$$F(x) = \mu((-\infty, x] \cap \{1, 2, 3, 4, 5, 6\}) = \mu(\{1\}) = \frac{1}{6}$$

$2 \leq x < 3$  のとき

$$F(x) = \mu((-\infty, x] \cap \{1, 2, 3, 4, 5, 6\}) = \mu(\{1, 2\}) = \frac{2}{6}$$

$3 \leq x < 4$  のとき

$$F(x) = \mu((-\infty, x] \cap \{1, 2, 3, 4, 5, 6\}) = \mu(\{1, 2, 3\}) = \frac{3}{6}$$

$4 \leq x < 5$  のとき

$$F(x) = \mu((-\infty, x] \cap \{1, 2, 3, 4, 5, 6\}) = \mu(\{1, 2, 3, 4\}) = \frac{4}{6}$$

$5 \leq x < 6$  のとき

$$F(x) = \mu((-\infty, x] \cap \{1, 2, 3, 4, 5, 6\}) = \mu(\{1, 2, 3, 4, 5\}) = \frac{5}{6}$$

$6 \leq x$  のとき

$$F(x) = \mu((-\infty, x] \cap \{1, 2, 3, 4, 5, 6\}) = \mu(\{1, 2, 3, 4, 5, 6\}) = 1$$

つまり、 $F(x)$  は  $i = 1, 2, 3, 4, 5, 6$  の各点で  $\frac{1}{6}$  ずつジャンプする右連続な階段関数になる。

例 1.14  $a > 0$  に対して  $\mu$  が次で与えられるとき, パラメータ  $a$  のコーシー (Cauchy) 分布という.  $A \in \mathcal{B}$  のとき,

$$\mu(A) = \frac{a}{\pi} \int_A \frac{1}{a^2 + x^2} dx$$

この分布関数は

$$F(t) = \frac{1}{\pi} \left[ \text{Arctan} \frac{t}{a} + \frac{\pi}{2} \right]$$

練習問題 1.12 次の分布の分布関数を求めよ.

(i) 区間  $[a, b]$  上の一様分布は

$$\mu(A) = \frac{1}{b-a} \int_{A \cap [a,b]} dx$$

である.

(ii) 2項分布  $B(3, 0.5)$ .

(iii) パラメータ 1 のポアソン分布

補遺 実は命題 1.14 の逆が言える. つまり, 右連続な単調非減少関数  $F$  が

$$\lim_{t \rightarrow -\infty} F(t) = 0, \quad \lim_{t \rightarrow \infty} F(t) = 1$$

を満たすとき, ある  $(\mathbf{R}, \mathcal{B})$  上の確率  $\mu_F$  が唯一存在して

$$\mu_F((-\infty, t]) = F(t) \quad \forall t \in \mathbf{R}$$

が成り立つことが知られている. すこし説明しよう.

言葉の準備がいる. いつものように  $\Omega$  を勝手な集合 ( $\neq \emptyset$ ) とするとき,  $\Omega$  の部分集合の族  $\mathcal{A}$  が  $\Omega$  の加法族であるとは,

(i)  $\Omega \in \mathcal{A}$ ,

(ii)  $A \in \mathcal{A}$  ならば  $A^c \in \mathcal{A}$

(iii)  $A, B \in \mathcal{A}$  ならば  $A \cup B \in \mathcal{A}$

の3つが成り立つときに言う.  $\Omega$  の  $\sigma$ -加法族は  $\Omega$  の加法族になるが, 逆は正しくない.

例 1.15

$$C_5 := \{(a, b]; -\infty < a < b < \infty\} \cup \{\mathbf{R}\} \cup \{\emptyset\}$$

とし,

$$\mathcal{A} := \{A_1 \cup \dots \cup A_n; \{A_j\}_{j=1}^n \text{ は排反}, A_1, \dots, A_n \in C_5\}$$

は  $\mathbf{R}$  の加法族である. 問題??の  $C_2$  と比べると,  $C_5 \supset C_2$  だから,  $\sigma(C_5) = \mathcal{B}$  となるが,  $C_5$  自身には  $\bigcup_{n=1}^{\infty} (2n, 2n+1]$  というボレル集合は含まれていない.

定理 1.15 (カラテオドリの拡張定理<sup>9</sup>)

$\Omega$  の加法族  $\mathcal{A}$  上で定義された集合関数  $Q$  が次の条件を満たすものとする.

<sup>9</sup>証明については, 西尾真喜子著「確率論」2章 §3 参照

(i)  $0 \leq Q(A) \leq 1 \quad \forall A \in \mathcal{A}, \quad Q(\Omega) = 1$

(ii)  $A_1, \dots, A_n \in \mathcal{A}$  が排反ならば

$$Q(A_1 \cup \dots \cup A_n) = \sum_{k=1}^n Q(A_k)$$

(iii)  $\{A_n\} \in \mathcal{A}$  が  $A_1 \supset A_2 \supset \dots$  かつ  $\bigcap_{n \geq 1} A_n = \emptyset$  のとき,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} Q(A_n) = 0$$

このとき,  $\sigma(\mathcal{A})$  上に唯一つの確率  $Q^*$  がとれて,

$$Q^*(A) = Q(A) \quad \forall A \in \mathcal{A} \quad (1.12)$$

が成り立つ.

$F$  から例 1.15 の  $\mathcal{A}$  上に  $Q$  を作ってみる.  $A = [a_1, b_1] \cup [a_2, b_2] \cup \dots \cup [a_n, b_n] \in \mathcal{A}$  とする.  $[a_i, b_i]$  たちは排反である. このとき,

$$Q(A) := \sum_{i=1}^n [F(b_i) - F(a_i)]$$

と定める.  $Q(\mathbf{R}) = 1, Q(\emptyset) = 0$  である. 上の条件 (i), (ii) はすぐに分かる. (iii) が面倒だが, 対偶を示す.  $A_1 \supset A_2 \supset \dots$  を  $\mathcal{A}$  の要素で

$$\lim_{n \rightarrow \infty} Q(A_n) = \alpha > 0$$

として  $\bigcap A_n \neq \emptyset$  をいう.

各  $n$  について,

$$A_n = (a_1, b_1] \cup \dots \cup (a_k, b_k] \quad \text{各区間は排反}$$

の形に書ける<sup>9</sup>. 作り方から

$$Q(A_n) = \sum_{i=1}^k (F(b_i) - F(a_i))$$

で,  $F$  の右連続性から, 各  $i$  について  $a_i < a'_i < b_i$  となる  $a'_i$  を十分  $a_i$  に近づけると

$$F(a'_i) - F(a_i) < \frac{1}{k} 2^{-n-1} \alpha$$

とできる. このとき,  $A'_n = (a'_1, b_1] \cup \dots \cup (a'_k, b_k]$  とおくと, これは排反な区間の和で,  $Q(A_n \setminus A'_n) \leq 2^{-n-1} \alpha$  となっている. これから

$$\begin{aligned} Q(A'_1 \cap \dots \cap A'_n) &= Q(A_n \setminus \{(A_1 \setminus A'_1) \cup \dots \cup (A_n \setminus A'_n)\}) \\ &\geq Q(A_n) - \sum_{i=1}^n Q(A_i \setminus A'_i) \\ &\geq (1 - 2^{-2} - 2^{-3} - \dots - 2^{-n-1}) \alpha \geq \frac{\alpha}{2} \end{aligned}$$

何が言いたいかというと, これは  $A'_1 \cap \dots \cap A'_n \neq \emptyset$  を意味している.  $A'_n$  の各半開区間  $(a'_i, b_i]$  を  $[a'_i, b_i]$  としたものを  $A_n^*$  と書く.  $A_n^* \supset A'_n$  だから  $A_1^* \cap \dots \cap A_n^*$  も空集合でない. しかもこの集合は  $A_1$  に含まれる閉集合なのでコンパクト性から

$$A_1^* \cap A_2^* \cap \dots \neq \emptyset \quad (1.13)$$

これは  $\bigcap A_n$  に含まれるので,  $\bigcap A_n \neq \emptyset$ .

<sup>9</sup>正確にはこれらの半開区間は  $n$  ごとに違っていると考える方が自然なので,  $a_1 = a_1^{(n)}, b_1 = b_1^{(n)}, \dots, k = k(n)$  などと書くべきだが, 記号が繁雑になるので, このように書いておこう.